

長塚節文學考

桜
楓
社

小瀬千恵子 著

長塚節文学考

小瀬千恵子 (こせ ちえこ)

昭和15年 岐阜県生まれ。
昭和38年 岐阜大学卒業。
昭和50年 立命館大学大学院修士課程修了。
昭和55年 実践女子大学大学院博士課程修了。
現 在 岐阜女子大学助教授。
著 書 『写生の系譜』(昭50)
現 住 所 岐阜市加納清野町14

長瀬節文学考

昭和五七年六月一五日 初版印刷
昭和五七年六月二〇日 初版発行

定価 二八〇〇円

著 者 ©小瀬 千恵子

発行者 今井 肇

印刷所 岩村田活版所

101 東京都千代田区猿樂町二一八一—一三

(株)桜楓社

(電話) (〇三)二九五—八七七—
(振替) 東京六一—一八〇二〇

長塚節文学考／目次

第一章 歌 論

| | |
|--------------|----|
| 写生を通してみた節と子規 | 5 |
| 歌論にみる万葉受容 | 23 |
| 大正期の歌論からみた場合 | 46 |

第二章 作 品

| | |
|-------------|----|
| 節短歌にみる歌風の変遷 | 69 |
| 節短歌の作風と鑑賞 | 80 |

第三章 写生文

| | |
|---------------|-----|
| 写生文について——虚子と節 | 117 |
| 写生文「佐渡が島」の方法 | 137 |

第四章 小 説

| | |
|------------------|-----|
| 「土」と節の小説観——写生の意味 | 157 |
| 「土」の性格 | 177 |

第五章 余論 (一)

子規の写生……………197

子規の写生文……………209

子規と左千夫——文芸的血脈について……………230

第六章 余論 (二)

『鶉籠』の世界——俳句的性格について……………257

寒川鼠骨の写生文論……………281

長塚節年譜……………302

あとがき……………311

第一章
歌
論

写生を通してみた節と子規

長塚節は、正岡子規晩年の弟子として、子規と深いかかわりを持ちつつ、自己の短歌の世界を形づくっていったわけであるが、節は短歌の写生についてどのような考え方を持っていたか。又子規の写生論のどの部分を受けついたのであるのか。本稿では節と子規の写生論を比較することによって、この辺を明らかにし、作品の上でも子規とどう関わっているのかを眺めてみようとするものである。

そこで、一応子規の写生についての考え方の輪廓を眺めてみると、まず素材に関するものとして、明治二十八年の「俳諧大要」の中で、「写実には人事と天然とあり」「人事の写実は難く天然の写実は易し。」「写実の目的を以て天然の風光を探ること最も俳句に適せり。」(明28・12・8 日本)と述べて、写生の材料としては天然と人事があると分類した上で、俳句に於ては天然の写生が適しているとする。この「天然の風光」の文学とのかかわりについて、「自然といふ事がある程度迄文学美術の基礎を為すは論を俟たず。」(「古池の句の弁」明31・10 ホトトギス)、「天然の美、殊に花樹花草の美は何人も之を感ぜざるはあらず、予は特に之に感じ易き

性あり」〔俳句の初歩〕明32・2 ホトトギス〕として、写生の材料となる天然・自然の景物が文学としての感動を与える基盤となる性格を持ち、子規自身が特に自然物を好む性癖が強かつたことを明らかにしている。

別にまた、俳句と天然とのかわりについては、

○天然は多くは簡單にして人情は多く複雑なりとの一語を言ふを以て足れりとすべし。〔明治二十九年の俳諧〕明30・1・8 日本〕

○俳句は元と簡單なる思想を現すべく、随つて天然を詠ずるに適せるを以て、元禄に在りて既に此傾向の甚しきを見る。〔同〕明30・1・25 日本〕

○複雑せる事物は小説又は長篇の韻文に適し、單純なる事物は俳句和歌又は短篇の韻文に適す。〔俳諧大要〕明28・10・24 日本〕

といった考え方を見せ、俳句に於ては複雑な「人事の賦し難き所以を論じ」〔明治二十九年の俳諧〕明30・3・15 日本〕、「初学の者は天然を直写するを可とす。」「〔俳諧反故籠〕明30・2 ホトトギス〕として、天然を材料とする考えを説いている。

これまで眺めてきた考え方は、節が直接子規に出会う以前の形成期の写生論であり、節が子規に出会う前後の子規の写生論についてみると、「再び短歌を募る辞」〔明33・1・8 日本〕に於て、「實際に森を見森を行く時の景色感情を詠むべし。」「周囲の光景（家、村、川、山、野、塔、鳥、紙鳶の類）を見廻し、森の中にある種々の小景（下草、墓、祠、寺、鳥獸、番小屋等の類）

しなくても見たものであればそれを思い浮かべて写してもよいという考え方をみせている。これは「再び短歌を募る辞」に於て「家に帰り、再び前の光景を眼前に浮べながらあそここゝを捉へ」て詠むことを説いたのと同じ考え方といえる。

このような写生における材料の規定に加えて、どのように捉えるかという態度の問題としては、客観的態度をとることを明らかにしている。このような態度について「和歌俳句の如き短歌には主観的佳句よりも客観的佳句多しと信じ居り候へば客観的に重きを置く」（『六たび歌よみに与ふる書』明31・2・14 日本）と述べて短歌にもあてはまるといふ考えをみせて、「『有の儘に写す』とは即ち『誠』に外ならず」（『曙覧の歌』明32・3・2 日本）と万葉の歌と曙覧の歌を賞讃するのである。

それは、「叙事文」に於ける、

○只ありのまゝ見たるまゝに其事物を模写するを可とす。（明33・1・29）

○作者を土台に立て作者の見たことだけを見たとして記さんには、事柄により興味の深淺こそあれ、とにかく読者をして作者と同一の地位に立たしむるの効力はあるべし。（同）
 という、ありのままに実地について写生することと関わってゆく。

次に、天然・自然の素材をありのままに写すことによつて、どのように読者に感動を伝えることが出来るかということについて子規は、印象明瞭ということをとなえている。

印象明瞭とは其句を誦する者をして眼前に実物実景を観るが如く感ぜしむるを謂ふ。故

に其人を感じしむる処、恰も写生的絵画の小幅を見ると略々同じ。同じく十七八字の俳句なり、而して特に其印象をして明瞭ならしめんとせば、其詠ずる事物は純客観にして且つ客観中小景を扱ばざるべからず。〔明治二十九年の俳諧〕明30・1・4 日本〕

印象を明瞭にしようとする場合に小景を写すことが効果があるという点については、

印象明瞭なる句は句の面に現し尽して読者の連想に待たず。之を實際に見るも、茫漠たる山野の大観を一望の中に収めんとすれば印象の不明瞭を来し、方一尺の函庭は明瞭なる光景を脳裡に印記す。況んや同じ十七字の区域に於て大観と小景とを現さんとすれば、大観の不明瞭にして小景の明瞭なるは然るべき事なり。〔同〕明30・1・18 日本〕

と述べている。

又「叙事文」の中でも、「或る景色又は或る人事を叙するに最も美なる処又は極めて感じたる処を中心として描けば其景其事自ら活動すべし。しかも其最美極感の処は必ずしも常に大なる処必要な処にあらずして、往々物蔭に半面を現すが如き隠微の間にある者なり。」（明33・3・12 日本）として、感動の中心となる隠微の間にあるような小さな景を描けば、自ずと印象明瞭になるとしている。

このような天然・自然の事物の中の小景を切りとって、その中の一部分を描写することの効果については別に、

牡丹数輪の花を把り来ると、只々一輪の牡丹を把り来るとを比較すれば、一輪牡丹の方

花の大きなやう感ず可し。是れ花の特別に大なるに非ず、一輪なれば比較すべき者なきがためなり。或は庭園中の牡丹を詠ずると、場所を指定せずして只一株の牡丹をのみ詠ずるとを比較すれば、後者の方牡丹の大なるを感ず。是れ亦牡丹の大なるに非ず、比較すべき者なきがためなり。(近く見れば大に遠く見れば小なるの理あり)〔俳諧大要〕明28・11・23 日本)

のように述べており、更に、一部分を捉えて表現する際の印象の強調ということにかかわることばとして、

病牀で絵の写生の稽古するには、モデルにする者はそこらにある小さい器か、さうでなければいけ花か盆栽の花か位で外に仕方が無い。其範圍内で花や草を画いて喜んで居るとある時不折の話に、一つ二つの花などを画いて絵にするには実物より大きい位に画かなくては引き立たぬ、といふ事を聞いて嬉しくてたまらなかつた。俳句を作る者は殊に味ふべき教である。(「墨汁一滴」明34・5・1 日本)

と述べて、引きたたせるための方法についての見解を示している。

さらに狭小な素材を描く場合に「其事物の位置と形状と運動との模様は成るべく細かに之を言はざるべからず。」(「明治二十九年の俳諧」明30・1・29 日本)、「細微とは狭き空間、短き時間」に於ける現象を精密に現すの謂にして、其特長は印象明瞭の一点に在り。」(「俳句新派の傾向」明32・1 ホットギス)として、細微な描写が印象明瞭に表現する効果を持つことを説く。

「叙事文」においても「事実を面白からしめんとせば」「或る一二箇所を詳かに叙するを可とす。」「事実を細叙したるは文の長所にして」「読者の同感を引く」(明33・3・12 日本)、「作者自身の実験を写さば其記事は或る一部に限られて、全体の風俗儀式を尽す能はざるの欠点あり。然れども美文即ち面白みの一点より見れば全体を尽さざるは毫も欠点として見ざるのみならず、却て或る一部分のみが眼の前に活動し来るため、益々空想に遠ざかりて、実際の感に近づかしむるなり。」(明33・2・5 同)としてゐる。これは限定された狭い事物を、事実のままに詳しく現すことによつて、作者の見た實際の感動を讀者に伝えようとする表現方法といえる。

以上、写生についての考え方が整備され、更に、他の文学ジャンルに押し広げられた跡を記してみたのであるが、この土壌の上に、節の写生説が形成される。

先ず、節と子規の交流であるが、節が子規に直接出会うのは、明治三十三年三月二十八日が最初である。それから一日おいた三十日に二回目の訪問をした。その時の模様を節は「竹の里人」(三) (明37・4 馬酔木)の中で、

先生は家族のものを呼ばれて線香に火を点ぜしめ、糖てこの線香の燃え切る間に茲の实景を歌に詠めと命ぜられた。自分はこんなことに遭遇したことが無いので少なからず不安心に感じた。已むを得ず筆を持つて出鱈目に書き付けたのが十首ばかりに成つた。此の日は非常によく霽れた暖かな日であつたが、ガラス障子の外は低い杉垣の芽が延びて下へ向いてゐる。薔薇の紅い嫩芽もついと立つてその上には小さな羽虫が群り飛んで居る。庭に

は柔かな草が萌え出して土はいくらか湿つて居る極爽快な日であつた。
と記している。その時の歌が

歌人の竹の里人おとなへばやまひの牀に絵をかきてあり

荒庭に敷きたる板のかたはらに古鉢ならび赤き花咲く

生垣の杉の木低みとなり屋の庭の植木の青芽ふく見ゆ

等の十首で、四月三日の「日本」に掲載された。その当時の感想を

此日は忘るべからざる楽しい日であつたが、自分のこの歌を清書して、残して行つて呉れと云はれたのを氣にも留めなかつたが、後三四日を経て日本に掲載されたのを見て僕は寧ろどうして掲載されたことかと驚いた。(竹の里人「三二」)
と記している。

この出会いの節の驚きが、その後長く節の中の文学意欲に関わり、短歌の世界が直接に方法論としての写生となつてゆくのである。

そこで節の写生について記してみると、節は自らの歌についての考え方の移り変りについて「歌譚抄を讀みて」に於て次のように述べている。

予がまだ根岸へ行かなかつた頃は唯日常目に触るゝものに依つてのみ作つて居た。後に万葉を見て忽ち万葉調に変化した。これが殆んど去年の春までつゞいた。飽きの来た時である。菜の花が門の畑にさいて居たが、いつしか花は末になつて莢になつた。鶉が莢を喰

ひに来る。或日行つて見ると鶺鴒が二羽飛び出した。黄色い翅がひら／＼と表はれる。面白く感じたので歌によんだ。(馬酔木十三に出て居るのがそれである)、予は不図考へた。直ちに天然に接触して写生をするといふのが現在の急務であると考へた。(明38・5 馬酔木)

そして「暫くは此の真面目な写生に立脚地を定めやう」(同)と考へたことを記している。

この写生の材料としての天然についての考えを記すと、次のようなものである。

○自然は我々にいくらでも手近に面白い動物や植物を分布して置いて呉れる。今後の歌人たるべきものはこの方面にも大に力を致してよからうと思ふ。(「竹の里人選歌につき」明37・

8 馬酔木)

○皆実景でなければ駄目である。竹の里人選歌中の作でも眼前の景物を取つて質実に詠んだものは、その当時に評判がなくても見飽きがしない。(同)

○写生といふ以上素より実況でなければ駄目である。現在に目に触れないものでも曾て見たことのあるものならば宜しい。(「写生の歌に就いて」明38・1 馬酔木)

○田園の風物は取つて材料とするに便利である。市街に居住するものは半日の閑を偷んで郊外の散策を試みるのが肝要であると思ふ。(同)

○写生歌は弊害が随伴しても其真面目なる限り常に天然と一致して離れない。(「枯桑漫筆」明38・4 馬酔木)

○直ちに自然と接触することの捷徑たるを悟らないのは甚だ齒痒い思がする。(同)

これらの言葉にみられるように、天然自然、田園の風物の眼前の景物、実景を写生の材料とする考えをみせている。

この天然、実際の景物を素材として選ぶ場合の留意点として、

○普通のものでも面白いものの出来るのは勿論であるが、出来ることならば珍らしいものを持つて来るがいい。(竹の里人選歌につき)

○これ迄人が注目しなかつたものを取つてした丈は自ら認める。(同)

○却て人の注目しなかつたものを捉へた点に於て称揚に値するのである。(枯桑漫筆(一))
等をあげ、珍しい材料を探す必要を述べる。

このことは

○万葉の歌は面白いが、いつでも万葉らしいものでは一定の模型を形つてしまふ所から逆とも見るに堪へられなくなる。

これ迄の方法は悪いといふのではない、唯飽が来て居るのである。(写生の歌に就いて)

○水は流動しなければ腐敗する、歌も一所に停滞すれば萎靡銷沈するのは同一の理である。

現在の趨勢は蓋しそれである。(同)

○我々の調子が千篇一律であることは自分で確に認めて居る。(枯桑漫筆(一))明38・8 馬酔木
等の考え方によって、飽きのきた平凡陳腐な歌からの変化を求めるときに、その材料となる天然自然の景物に、珍しいもの今迄人の注目しなかつた物を取りあげる事の効果を考えたものと